

政策評価のための実証的証拠を提供する

中嶋 亮 なかじま りょう
経済学部 教授

学部生約30名が所属する研究会と大学院生6名で構成される研究室では、政策効果を定量化し、社会問題を解決するためのEBPM (Evidence-Based Policy-Making) の実践を目指しています。

近年、政策効果を実証的に示し、政策実施への説明責任を果たすという「証拠に基づく政策決定 (EBPM)」が求められています。私が専門とする実証経済分析は、経済理論を基にした人々の意思決定モデルを個人単位のデータから検証し、EBPMの礎となる実証的証拠を提供する学問分野です。

当研究会・研究室は実証経済分析のツールを使って政策効果を定量的に計測し、社会問題を解決するためのEBPMの実践を目指しています。その特徴は以下となります。

(1) 主体的な学習・学生は教員指導を基礎にしつつも自ら考えて学んでいます。研究会・研究室における私の主要な仕事は学習環境の構築であり、学生は個人学習または学生勉強会を通じて、因果推論や構造推定といった高度な計量経済分析の技法、機械学習や自然言語処理といった最新の計算機技術を習得しています。

(2) 自由な研究課題・学生は実証経済分析の手法を適切に使い正しく論証を

する限り、どのような研究対象を選んでもよいことになっています。私自身は、知識経済学に興味があり、知識波及とイノベーション促進政策を中心に研究していますが、学生の研究テーマは産業政策、医療問題、女性労働、スポーツ興行と広い分野にわたっています。

(3) 協働を重視・学部生は数人のグループで同一の研究課題に取り組み、塾内外の他研究会との合同報告会で研究成果を発表します。大学院生は個別の研究を推進しながらも塾内外の研究者と積極的に共同研究を実施しています。最近では研究室内の共同プロジェクトを立ち上げ、コロナ禍における行動制限が人々の精神衛生に与える影響を定量化し、私と大学院生数名で共著論文を完成させました。

多様な若者と一緒に学び真理を探究できることはこの上ない喜びです。今後も一丸となって実証経済分析を実施し、政策評価のための科学的な証拠を提供していきたいと思っています。

経済理論に基づいた実証分析

きたがわ けい
北川 慶君 経済学研究科修士課程2年

中嶋亮研究会・大学院研究室では応用計量経済学を研究領域としており、研究会では3年次にグループで三田祭論文を執筆し、4年次に1人で卒業論文を書き上げます。大学院研究室では先生との共同研究や自身の研究を進めながら、おのおの研究や分析手法について意見を交わし合っています。実証分析の手法は近年発展が進み、データの背後のメカニズムを推計することで実際には起こらなかった仮想的な状況を再現し、現実との比較ができるなど政策評価を行う上で強力な手段となります。しかし先生や先輩方からはその手法だけにとらわれず、その結果の経済学的・社会的意義を強く意識するよう指導を受けています。



動ける体を取り戻す

整形外科教室は脊椎・四肢の骨、筋肉、関節、神経、靱帯などを動かす臓器（運動器と呼びます）の疾患や外傷の予防と治療を担う診療科です。子供から高齢者まで全ての世代が治療の対象となりますが、社会の急速な高齢化を背景に近年高齢患者の数が増加しています。ひとたび運動器疾患にかかると、痛み、麻痺、関節の動きの制限、体の変形などにより歩く、走る、ものを持つなど日常生活動作の不便を余儀なくされ、生活の質（QOL）が著しく低下します。整形外科学教室では脊椎、上肢、下肢、腫瘍の4つの診療グループに分かれて、まずは薬や注射などによる保存療法を行い、無効の場合にはさまざまな手術を行っています。慶應義塾大学病院では年間2000件を超える全国でもトップレベルの質と数の整形外科手術が行われています。脊椎や関節の内視鏡を用いた患者負担の少ない手術、脊椎の曲がりを矯正する側弯症手術、ロボットを用いた精密な人工関節手術など

その技術も急速に進歩しています。診療に加えて運動器疾患の根本的な原因や病態を明らかにして、より良い治療を開発するための研究も精力的に行っています。iPS細胞を用いた脊髄再生、将来の腰痛治療を目指した椎間板変性の分子メカニズムに基づいた治療薬の開発などはすでにヒトを対象とした臨床研究を行っています。その他、骨粗鬆症、関節リウマチ、廃用性筋萎縮、側弯症など幅広い疾患の病態解明を目的とした分子生物学的研究に加え、バイオメカニクス研究室ではヒトの関節や脊椎の動きを動作解析装置やCTなどの画像を用いて計測し、手術後のリハビリやスポーツパフォーマンスの向上に役立てようとしています。これらの研究成果を社会実装するためにベンチャーを立ち上げたメンバーもいます。このように整形外科教室では「動ける体を取り戻す」を合い言葉に、誰もが元気に体を動かし活動できる社会の実現に向けて教室スタッフ全員で診療・研究に取り組んでいます。

整形外科教室は脊椎（せぼね）、四肢の疾患や外傷による痛み、機能障害のある患者の方々のQOL向上のために診療・研究に精力的に取り組んでいます。

まつもと ちかお

医学部（整形外科学） 教授

基礎研究から臨床実践を目指して

せ と たかゆき
瀬戸貴之君 医学研究科博士課程4年（執筆当時）

当教室では、脊髄損傷に対する再生医療の研究をはじめ、脊椎・四肢の生体力学（バイオメカニクス）研究、筋肉・血管・神経のウェットバイオロジーなど多彩な研究を行っています。特に脊髄の再生医療やバイオメカニクス領域は学位を取得された先輩も非常に多く、国際学会での発表も豊富です。学位取得後に海外留学される先生も多く、とても充実した指導を受けることができます。また、いずれの領域においても臨床実践につながる研究が可能になっており、その後の臨床活動において強力なバックボーンとすることができ、長い医師人生において非常に有意義な4年間になると思います。

